

書評

山下 格 著

精神医学重要文献シリーズ Heritage

誤診のおこるとき

精神科診断の宿命と使命

山内俊雄

本書は、“早まった了解を中心として”というサブタイトルがつけられて 1980(昭和 55)年に「精神科選書」(診療新社)として出された本が下敷きになっている。この選書シリーズに含まれる 10 数冊の本はいずれも、ハンディで読みやすく、しかも精神科診療のコツや真髓に迫る良書が多かったが、なかでも「誤診のおこるとき」は名著との評判の高かった本である。

著者は、“医師国家試験に合格したばかりの若い精神科医、あるいは精神医学に興味をもつ学生諸君が、休日のつれづれに寝転んだまま一日で読み終えて、翌日からの診療にすぐ参考になる”ことを念頭において書いたと述べているように、記述は平易で具体的、いずれも自らが身をもって経験した症例を中心に書かれている。「身体疾患の症状と了解」「躁うつ病(改訂新版では、気分(感情)障害)と了解」「精神分裂病(当時)と了解」などの章に、今回の改訂新版では、「うつ病の労務災害と職場復帰」「パニック障害と了解」「精神安定剤・睡眠薬の副作用」「発達障害と了解」の章が新たに加えられた。

これらの各章でそれぞれの“疾患の了解”について記述するに先立って、「誤診とは」「了解とは」といった、精神医学の根本問題について、改めて章を立てて、日常的な言葉でわかりやすく述べているが、その意味するところは奥深く、精神医学にとって、重要な課題が語られている。

誤診については、“誤診を単なる病名というラベルの貼り間違いということではなく、総合的判断や治療、治癒後の問題も含めて、広い診断手続きであり、医療のすべてを含めて、そこに誤診(判断の誤り)が無かったかということである”と記しているように、実は誤診という窓を通して、精神医学の診断のあり方、経過を追って治癒に至る道筋、その後の

経過のすべてを、患者さんとかかわりを持ちながら、誤りのないように、絶えず判断の微調整をすることの大切さを語っているのである。

このような視点から、誤診という縦糸に、了解という横糸を通して、了解がどのような意味を持つかを述べている。それも誤診が了解の不足や行き過ぎによって起こることを指摘するにとどまらず、どのようにして“了解するという能力”を身につけるべきかにまで、話が及んでいる。

こうして誤診と了解という視点を通して、それぞれの症例のどこに問題があって、判断の誤りや了解の妨げになったかが具体的に見えてくるのである。しかし、この本は単なる判断の誤りや見通しの間違いについての告発あるいは告白の書ではなく、図らずも、精神医療における診断・治療、そして患者さんとのつきあい方についての手ほどきの書となっている。

改訂新版で新たに付け加わった付章「精神科診断の宿命と使命」が本書の持つ意味を明らかにし、まとめの役割を果たしている。その中で、著者は精神科診断に際して重要な診察者の了解能力は①個人の人生経験、②精神科の臨床経験、③専門・非専門の知識によって培われるものであると述べ、加えて操作的診断法についても言及している。

本書は精神科診療の実践を大切に、楽しんで診療をしてきた著者の人柄がにじみ出た名著である。この本を読んで、精神科診療の奥深さと、力動的、多面的な精神症状のとらえ方と考え方の大切さと、精神医療の楽しさを改めて教えられたと同時に、“精神科医であって良かった”と思わせる、そんな本である。

(埼玉医科大学)

●四六判 200 頁 2009 定価 3,360 円(本体 3,200 円+税) みすず書房